

太良町の文化財と 祭と民俗芸能



発行 太良町むらおこし実行委員会



表紙絵写真 太良町役場入口に建てられた「太良町名の由来」

「太良町の文化財と祭と民俗芸能」の発刊に当たりて

むらおこし実行委員会観光開発委員長

太良町観光協会会長

久保豊蔵

太良町は昭和59年～60年の2ヶ年連続、「むらおこし」事業の指定を受けました。私達はこれを機会に此の事業を推進し、太良町の活性化を図るべきだと思います。

太良町「むらおこし」事業実行委員会では、観光開発委員会、農林畜産加工委員会、水産加工委員会の三つの専門委員会を設置して、それぞれの分野で、「むらおこし」事業を推進することになりました。

太良町には数多くの古墳や、竹崎観世音寺をはじめ、素晴らしい史蹟や民俗芸能等がたくさん残されています。ところが、これらの史蹟や民俗芸能について、町外の人々は勿論、町内の人でも、よく知っておられる人は大変少ないのではないかと思います。私は先般町内の史蹟廻りに参加して、町内にもこんなに素晴らしい史蹟があることを知り、びっくりしました。

太良町の観光事業を開発して行くためには、長い歴史の中で培われ残されてきた、これらの史蹟や文化財を忘れてはなりません。

「むらおこし」事業実行委員会では、これらの史蹟や民俗芸能等の文化財を広く一般に理解していただく為の案内書をつくることにしました。

今後私達は、これらの貴重な史蹟を整備し、民俗芸能を伝承し、霊峰多良岳と、竹崎カニ等の有明海の海の幸を組み合わせ、これを更に全国的に紹介し、宣伝に力を入れれば、もっと観光客も増加し、太良町の発展につながると思います。

この本が広く町内外の人々に活用されて、太良町の史蹟や文化財に対する理解や関心が得られ、太良町の「むらおこし」事業と観光開発に一層の御理解と御協力を賜りますように念願致します。

最後にこの本の製作に献身的な努力をしていただきました歴史民俗資料館長の浜崎先生に、心から感謝致しますと共に、この本が太良町の歴史資料として永遠に残ることを祈念してやみません。

1. 太良町の概況

太良町は、今から数千年の昔から人々が住みつき、景色のよい海と山に恵まれた、たいへん住みよい町でした。

和銅6年（今から1272年前）にできた肥前風土記に、景行天皇、此の地に至り「地勢狭くあれども、食物豊に足らえり。豊足の村というべし」と言われ、その豊足の村が叱って、太良となったと書いてあります。

歴史民俗資料館の横に建てられた、碓登志雄の歌碑には、「太良びとは心豊けし遠つ世のゆたたりむらの名をおひ継ぎて」と書き刻んであります。

人口12,889人	}平成元年11月1日現在
戸数 3,214戸	
面積 74,58km ²	

昭和30年2月11日 多良町、大浦村合併 同年3月1日旧七浦村伊福を編入し、太良町となりました。

藩政時代は、旧多良村、大浦村は諫早藩領でありました。伊福は川久保藩（鍋島藩の一部）でありました。

目 次

ごあいさつ

むらおこし実行委員長 待永九州男 1
「太良町の文化財と祭と民俗芸能」の
発刊に当たりて

観光開発委員長 ……久保豊蔵 2

I. 太良町の概況 …… 3

II. 産業経済の概要 …… 4

III. 文化財

1. 竹崎観世音寺 …… 5

2. 夜燈鼻燈台跡 …… 7

3. 竹崎城趾 …… 8

4. 比翼塚 …… 9

5. 慶深坊の墓 …… 12

6. 田古里古墳 …… 14

7. 道越古墳 …… 15

8. 広江宝前鼻古墳群 …… 16

9. 御手水権現さん …… 17

10. 大川内の地藏院 …… 18

11. 山茶花の茶屋 …… 19

12. 石造三重塔 …… 20

13. 石造六地藏塔 …… 21

14. 橋本野酔歌碑 …… 21

15. 八並雄次郎（幽白）歌碑 …… 22

16. 吉田瑞穂詩碑 …… 23

17. 碓 登志雄歌碑 …… 24

18. 星野満郎歌碑 …… 25

19. 島木赤彦歌碑 …… 26

20. 平浜神社 …… 26

21. 大乘妙典一字一石塔 …… 28

22. 英俊 保寿靈神石祠 …… 29

23. 湯牟田古墳 …… 30

24. 里の六地藏塔 …… 31

25. 誓願寺の山門 …… 32

26. 宇賀神社 …… 33

27. 平浜古墳 …… 34

28. 円満寺の鐘楼 …… 35

29. 大野城趾 …… 36

30. 榎の内六地藏塔 …… 37

31. 権太郎谷田 …… 37

32. 権現坂の阿字塔 …… 39

33. 役の行者座像 …… 40

34. 六体地藏菩薩立像 …… 41

35. 歴史民俗資料館と壺甕棺 …… 42

IV. 祭

1. 竹崎観世音寺修正会鬼祭 …… 43

2. 鬼火たき …… 44

3. 御手水の的射り …… 45

4. もぐらうち …… 47

5. 円座祭 …… 48

6. 竹崎観世音寺の星祭 …… 49

7. 竹崎観世音寺の流れ灌頂 …… 50

8. 竹崎観世音寺のきゅうり封じ祭 51

9. 太良嶽神社の秋祭 …… 52

10. 蕪田の泥餅つき …… 53

11. 十夜市 …… 55

V. 民俗芸能

1. 川原狂言 …… 57

2. 民謡ザンザ節 岳の新太郎さん 58

3. 鎌踊り …… 60

4. 新地節 …… 61

5. おゆきと妙巖さんの歌 …… 62

附 太良町郷土史年表 …… 65

太良町文化財所在地地図 …… 67

ごあいさつ

太良町むらおこし実行委員長

太良町商工会会長

待永九州男

太良町は、西に秀峰多良岳が聳え立ち、東には浪静かで、潮の干満の差が日本一大きい有明海が広がり、山の幸、海の幸に恵まれた風光明美な実に住みよいところであります。

随って数千年の昔から人々が住みつきました。そのため、我々の祖先が残された数多くの古墳や、竹崎観世音寺をはじめ、多良岳の金泉寺・多良嶽神社、その他神社やお寺にまつわる有形無形のすばらしい文化財が遺されています。

太良町むらおこし実行委員会では、これら貴重な町内の文化遺産を、広く町内外に紹介するため、「太良町の文化財と祭と民俗芸能」という小冊子を作りました。むらおこし町づくりは先ず、人づくりからとも言われています。今日の社会生活が激変するなかにおいて、私達は、先祖が残してくれた文化遺産を大切に保存し、伝承していくと共に、長い歴史の中で、今日のすばらしい太良町を築いてくださった先祖の努力やお骨折に感謝し、更に進歩発展させて、もっと豊かで美しく楽しく住みよい太良町を築いて、子孫に残していかなければなりません。

「我々は、昨日を今日に導いた先人に感謝し、更に今日を明日に導くことに努力する」ことを目標にしていきたいと思えます。

皆様の御好意と御教示に感謝の意を表すると共に、今後一層の御指導と御後援をお願い致します。

II 産業経済の概要

太良町は農業・漁業・林業を主産業として生計を営む町であって、農業経営の中心は、みかん園栽培です。農家戸数は1300戸、みかん園は1,220 ha であります。

農家収入の内訳は、みかん30億円・水稻5.8億円・畜産関係20億円であります。

畜産関係の内訳は、肉牛 3億6,000万円・牛乳 1億3,500万円・豚 7億5,000万円・ブロイラー 7億3,700万円です。

大正から昭和初年までは麦・芋・養蚕を中心とした畑作農業で、大変貧しかったが、戦後みかん栽培が盛んとなり、現在京浜市場をはじめ、関東・東北地方に「たらみかん」として送り、声価を揚げています。

畜産では、昔から多良豚は肉質が良いと評判が高く、現在では、丘陵部を中心に、1戸当たり数百頭の豚を飼育しています。その他和牛、乳牛、ブロイラーの飼育も盛んです。

漁業面では、364戸約1,000名が漁業に従事しており、竹崎・道越・野崎部落を中心に潜水業が盛んで、たいらぎの漁獲量が一時は26億円にも上がりましたが、最近は漁獲量が少なく、瀬戸内海や北九州・南九州各地に出稼ぎに行っています。また、最近では海苔の養殖が盛んで、生産量は年間10億3,000万以上（57年調査）になっています。

有明海は、漁区が狭く、たいらぎその他の魚貝類はすぐ取り尽くしてしまいますので、最近は稚かにや稚魚を放流して、所謂、取る漁業から育てる漁業に変わっています。竹崎かにも毎年数百万尾の稚かにを放流していますので、これから益々沢山とれるものと期待されています。

林業関係では多良岳山麓に約3,700 ha の檜や杉の造林が行なわれ、今、美林が続いています。

観光面では、竹崎かのにの味覚を賞味して頂くお客さんが年と共に増加し、年間20万人を数えます。

太良町観光協会では、お客様方の御期待に応えるよう、史蹟の整備や資料作りに御案内を致すよう用意致しております。

どうぞ今後共、この太良町をお忘れなく、御訪ね下さるようお願い致します。

III 文化財

1. 竹崎観世音寺



この寺は奈良時代の和銅2年(709年)今から1276年前に行基菩薩によって創建されたとされる真言宗の由緒ある寺院であります。

この寺の開基をされた行基菩薩が肥後の国宇土郡を通られた時、途中に橋があって、その橋が毎晩怪しい光を放って、往来の人々を悩ませていました。土地の人々はどうすればよいかと菩薩に救いを求めてきました。

菩薩は、「その橋の橋桁^{げた}は霊木である。それを知らずにその上を踏みつけて通っているからだ。」「この霊木の流れついた所を訪ねてそこに観世音像を刻み^{まつ}祀ります。」と申され、その橋桁を七つに切って有明海に流されました。

行基菩薩が肥前の国に来られますと多良岳に住む二匹の夫婦鹿が現われて、「道案内をさせて下さい」と申し出ました。そして来たところがこの竹崎であります。

この竹崎の観音ほきというところに一本の霊木が流れついて芳香を放っていたということです。菩薩はこの霊木で一刀三礼の法

をもって千手観音像を刻み、この寺の本尊仏としました。また、道案内をした夫婦鹿は、その後、永く子孫が栄えたということで、今、鹿山に鹿大明神として祭られています。

この寺は、昔は三十三の堂塔が立ち並んで平安時代は天皇家の菩提寺である京都の仁和寺の末寺として、鹿島市能古見の金剛勝院や塩田の常在寺と共に大変栄えていました。又鎌倉時代中期の後深草天皇の御代には、勅願寺とされ、石造三重塔を初め、多くの石造の塔が残されています。又、室町時代にも600巻の般若心経が写経されて、現在まで残されており、大永5年にできた石造六地藏塔も残っています。

江戸時代には、有明海周辺の大名の信仰が篤く、特に諫早候は、この本堂を初め、海岸から境内までの石壇を造られたということが諫早藩日記に記録されています。

このように九州西国二十二番の霊場として大変信者の多かった寺であります。

今も昔ながらの古い祭りが残っており、毎年1月5日～6日の修正会おにまつり鬼祭は、昭和60年1月文部大臣により国の重要無形文化財に指定されました。その他2月3日の星祭、4月8日の甘茶祭(灌仏会)、5月中旬の流れ灌頂かんじょう、8月1日～5日のきゅうり封じ祭等伝統的なお祭があります。

こんな祭には、有明海周辺から数百名の信者が今も参拝されています。皆さんも是非一度御参拝下さい。

2. 夜燈鼻燈台跡



竹崎沖は、昔から海の難所と言われ、外海から流れ入る有明海の潮流は竹崎沖で東西に大きく分かれ、佐賀方面と諫早方面へと流れ込み、満潮となり、干潮には逆に佐賀方面からと諫早湾からの潮流が、竹崎沖で合流して外海へ出ます。この分岐と合流の複雑な浪立ちが、「竹崎沖の三角浪」といわれて、古くから恐れられてきました。その上、鶴の瀬等の浅瀬があった為、海難事故が絶えませんでした。

それで、もともとこの夜燈鼻と佐賀港には燈台があつて、それぞれ寺で管理してきました。その後、暫く中絶していたのを、寛延年間（1748年～1750年）今から235年位前に諫早藩の早田番左衛門という人が、再建しましたが、文政11年、大風で倒れてしまいました。

そして、明治2年、番左衛門の五世の孫、早田市右衛門がこの地に再建しました。これが我が国、燈台史上初めての十一面ガラス鏡式洋風燈台で、その当時は最新式のものでした。それまでは、竹崎観世音寺で管理していましたが、昭和29年海上保安庁により、新燈台が設立されて現在に至っています。

今、その跡に佐賀藩、国学副教授でありました武富^い圮南の筆による照海燈の碑が建てられています。

3. 竹崎城跡



竹崎城は、南北朝時代の築城と伝えられています。

足利尊氏の反逆により、後醍醐天皇は吉野にお逃げになり、足利尊氏の北朝側と戦われました。そうして、肥後の菊地武光、阿蘇^{これなお}惟直を支援するため、皇子懐良親王^{かねなが}を征西將軍としてつかわされました。その為、南朝方は一時大いに意気がありました。

天授4年(1378年)今から607年前島原の有馬隆泰は、懐良親王^{かねなが}に味方して兵をあげ、この竹崎城を構築してたて籠り、足利方の鎮西探題今川了俊の大軍を退けて功を立てました。

今太良町内に古城跡と伝えられる伊福城、城山城(瀬戸)、正知田城(川原)、八幡城(北町)、城の辻(陣の内)等もこの時代に築かれ、竹崎城を中心にして、南朝方の味方をしたものと言われています。

竹崎城は、その後も幾度かの攻防の歴史を秘めております。この城は、竹崎島の特殊の地形を利用した水陸両面に備えた山城と

水城との性格を合わせもつ、構築様式で、中世の城郭研究上重要なものであるが、城郭の主要部分は殆んど破壊されていて、往時の規模や構造を偲ぶことはできません。

現在、僅かに東西500メートル、南北600メートルにわたる石垣の一部が残り、又、幅10メートル、深さ6メートル、長さ40メートルにわたる空濠が二條残っているにすぎません。

4. 比翼塚

天正19年（1591年）豊臣秀吉が行なった朝鮮出兵に応じて筑後柳川の立花藩も出兵しましたがその立花藩の若武者の中に真之介という美しい武将がいました。

真之介が朝鮮へ出陣した後、多くの人々の中にまじって、真之介の母親と許婚の若姫は毎月一度はこの竹崎観世音寺に真之介の武



運長久を祈り続けていました。ところが真之介は朝鮮で敵の地雷のため両眼とも失明し、憐れ戦場の露と消えるところを不思議に生きながらえて、やっとのことで故国日本に帰ることができて我が家にたどりつくことができました。

母と許婚の姫は、この真之介を優しく慰めてやっとなりに乗せ、有明海を渡り、竹崎観世音寺にお礼参りに連れてきました。そして平井坊の座敷に座して、法印老師から、「たとえ肉眼は見えなくても、心の眼を開いてもらえば今迄よりも、もっと広く深く世界を見ることが出来るものです。あなたは今その機会を与えられようとしているのですよ」。とじゅんじゅんと説かれる法話を聞き、発心して出家し、名を真海と改め、学僧として修業をつむことにな

りました。そして許婚の若姫に、長い間の懇情とお世話を謝し、愛刀一ふりを形見に贈り、最後のお別れをしました。そして「私のことは一切忘れて一日も早く良い人を見つけ、身を固めてくれ」とたのみました。

こうして真海は、ただひとすじに心眼を開くため、つらい修業に励みました。一方若姫はどうしても真海のことを忘れられず、肉眼の開眼を願って「南無竹崎観世音菩薩様、不憫と思し召して、何卒、彼の眼を開く為、お慈悲の光をお与え下さい」。と祈り続け、千日間の燈籠流しの願をかけ、毎晩、柳川の海岸から竹崎の沖へ向けて、小さな燈籠に火を入れて、3年余りの間一夜も欠けることなく流し続けました。

有明海周辺の漁師達は、この怪しげな火に初めは恐れて、何の火であろうかと騒ぎだしました。しかし、一人の女性の美しくも悲しい願かけの燈籠であることを知ると、感心するようになりました。

こうして、遂に千日満願の夜がきました。人々は今夜こそ真海の眼が開くだろうかと、海辺に集まって最後の夜の燈籠の流れてくるのを待ちました。そして真海も朋輩と共に、観世音寺の境内から沖の方を眺めていました。まぎれもなく最後の献燈の光が波間がくれに西へ西へと流れてきました。「真海さん。見えるか!？」と友人が尋ねますと東の方を見つめていた真海は、やがて右手をあげて、眼と共に指先もその燈籠を追いつつ、西の方へ動いていくのでした。

そして、あら不思議や、真海の眼にはっきりと沖の光が見えてきました。みんなは、「ああ。真海さんの眼があいたぞ!!」と感動しました。

こうして、真海が失明して以来、3年目に姫の純情な悲願が、竹崎観世音菩薩に通じたのでした。然し、真海の師の法印は心配しました。「真海よ。そなたは、廣大無辺の菩薩のお力によって、両眼が開眼した。しかし、ここでそなたの心が乱れては、今迄の修業も水の泡になる。決して、心を動かされてはなりませんぞ」と諭されました。一方姫は、両眼が開いたと聞いて、真海を訪ね、千日願成就のお礼参りに竹崎を訪ねました。

真海は、「あなたの限りない真心に感激しています。しかし、ど

うかこれを以て私のことは忘れて下さい…」と頼みました。

こうして、二人は遂に結ばれることはありませんでした。そして、夜が明けて、竹崎の夜燈鼻海岸に胸に真之介の形見の刀と一通の遺書を抱いた姫のなきがらが漂着していました。

この遺書には「真之介様を想う心に変わりはありません。もし私を不憫と思うなら、私のなきがらは竹崎島渡り口の岩陰に埋めて下さい。せめてその木陰から、毎日修行に出られる真海様のお姿を拜ませて下さい」と書かれてあり、それを読む人々は一人として同情せぬ者はありませんでした。

後に、修業の道に励んだ真海は、遂に、竹崎観世音寺の法印職につきました。しかし、最後は心の重荷に苦しめられたのか、病の為に亡くなられたといえます。

人々は後で、姫の慕情を憐み、姫の墓の側に真海法印の墓を並べて、永久の比翼塚としたのでした。時に慶長4年12月23日と刻まれています。ちなみに当時は、法印職にあった者の比翼塚は許されない時代でありました。その為か、真海の墓には名を刻んでありますが、姫の墓には、何も書かれていません。

今、この比翼塚のことを歌った「千燈籠流し」の歌と踊りが、この太良町では流行しています。その歌詞は次の通りです。

1. 肥前の國は竹崎の 観音堂に籠りする
盲の僧ありその人は 柳河藩の若侍
朝鮮の役に従軍し 傷つきここにたどりつく
2. 郷里に残りし許婚 真海の眼を治さんと
かけし悲願は海の上 一日一燈千日の
流す燈籠千燈籠 竹崎さして流れゆく
3. これぞまさしく不知火か 満願来たり真海の
眼は開きたりというを聞き、やれうれしやと逢いにゆく
恋しい人は戒律の 厳しさゆえに追い帰す
4. 姫は形身の刀抱き 有明海の波に消ゆ
やがて真海世を去りて 共に祀られ比翼塚
悲恋の由緒いまの世に しのびて流す千燈籠

5. 慶深坊の墓

江戸時代の中頃、竹崎城に北島藤左衛門という悪名高い城代がいて、有明海を通る船をおどして金や物を奪ったり、近在の弱い者をいじめていました。

その頃、竹崎観世音寺には阿闍梨慶深坊あじかりけいじんという文武両道の達人で情深い坊さんがいました。

藤左衛門は竹崎沖を通る船に対して、帆を八合目まで下げて通るように命じていました。

或る日、そのことを知らず、満帆まんぽのまま通り過ぎようとした為、藤左衛門に切り殺された他国者の夫婦が、船の中で死んでいました。そして殺された母親は男の赤ん坊を抱きかかえ、かくまったままでした。村人達はその船を発見し、慶深坊に救いを求めました。

慶深坊はその赤ん坊を寺につれていき、名を慶順とつけて、小僧の修業をさせました。又、藤左衛門の暴虐がある度に、慶深坊は、城に乗り込んで、藤左衛門の悪行を責めていました。その為慶深坊に対する村人の尊敬は益々高まっていきました。それで藤左衛門にとって慶深坊は目の上のたん瘤こぶであり邪魔者でした。

或る時藤左衛門は田古里村方面へ修業に行つて帰る慶深坊を道越の街で襲う計画を立て道に深い落とし穴を掘らせました。そして街中の家に大戸を下ろし、一人も家から出てはならない。お一こ（てんびん棒）一本でも軒先に出してはならないと厳しいおふれを出し、名主の幸兵衛にもそのことを命じました。

慶深坊は夕闇迫る頃、一日の修業を終えて疲れた足どりで何も知らず急ぎ足で帰っていると、不意に藤左衛門一味の襲撃をうけ



ました。武道の達人といわれた慶深坊は手にもった愛用の鉄扇で後すぎりながら防いでいましたが、落し穴に陥り、遂に殺されてしまいました。

慶深坊は息を引き取る前に「かねがね目をかけてやった道越の街の者達が、私を裏切り敵の味方をするのは卑劣なことだ。今はこんなに栄えているこの街も、いずれ黒こげになるだろう」と言ったそうです。

急の知らせに弟子の慶順が急いで駆けつけた時は既に遅く、慶深坊は冷たい姿と変わり果てていました。落し穴の傍らに落ちていた師匠の鉄扇を拾い上げた慶順は、そのまま何処ともなく姿を消してしまいました。そして時が流れこの出来事も忘れられようとする頃突如として道越の街に恐ろしい黒死病コロリが流行し、次々に死者が出て、それを防ぐ為には街の家々に火をつけて焼き払う他はありませんでした。

今迄賑わった道越の門前街も慶深坊の予言通り、淋しい焼野ヶ原と化してしまいました。

道越の人々は、今更ながら自分達のしたことを反省し、おそろしくなり、慶深坊の霊を慰める為、慶深坊が亡くなられた近くにその墓を建て、今も7月には必ず千燈籠をあげて、慶深坊を祀っています。

それからまた十数年たちました。その正月5日、例年のように竹崎観世音寺のおにまつり鬼祭が、あっていました。その日藤左衛門は有明海周辺の各地から参拝される大名や武将達の警固見廻り役を勤めることになっていました。その為、城中に勢揃いした侍達は着座して、藤左衛門の指図を待っていました。藤左衛門も服装を整え、小姓の一人に刀を床机から取ってくるように言いつけました。その時小姓は古びた鉄扇を差し出しました。藤左衛門が不審に思っていると「よもや、この鉄扇を忘れはすまい。これはもと観世音寺阿闍梨あじかり慶深坊様愛用の鉄扇なり。かくいう我が身は、小姓の姿をしているが、何を隠そう、弟子の慶順である。そなたは十数年前、我が生みの親を殺害し、更に師匠をも殺した。親の仇、師の仇をはらす為に久しい間、忍苦の日を過ごしてきた。藤左衛門思ひしれ」と藤左衛門目がけて真向から切り下ろしました。そして、「親の仇、師の仇のみならず、暴虐比類なき、藤左衛門を天に

かわって慶順が成敗した。今日は、観世音寺の鬼祭。今や無道の鬼を討ちとった。いざ我と思わん者は出合え…」と叫べば、さすがの家来達も出合う者はなく皆急いで見廻り役に出てしまいました。

こうして、目出度く、親と師の仇をうった慶順は取り調べの結果、一切おかまいなしということで許され、再び観世音寺に帰り、修業にいそしんだということです。

この話は、江戸時代中期延享の年のことで今から238年も前のことです。しかし、今も竹崎や道越ではこの話が語り継がれています。この墓には、寛延元年戊辰十月二十八日と記されています。
(1748年)

6. 田古里古墳

太良町には、この田古里古墳を初め、数多くの古墳が残っています。

古墳は今から1300年～1700年位前の古墳時代につくられた豪族達の墓であります。

田古里古墳は6世紀後半(1400年位前)につくられた円墳で、封土の直径10メートル、比高5.8メートルもあります。内部は西方に開口する横穴式石室で、^{げんしつ}玄室は奥室と前室に分かれた複式墳で、^{せんどう}羨道を含めて、石室の全長10.87メートル。幅2.97メートル。高さ4.2メートルで、自然石の巨大な腰石の上に大きな塊石を持送り式に積みあげてあります。尚、この古墳の前室内に線刻紋様を有し、封土の周囲には県内では他に例をみない空濠が^{からぼり}めぐらされています。



このように、大きな古墳がいくつも太良町にあるということは、この地方が早くから進み、当時人々が多く住みついでいて、文化が開けていたことを物語っています。当時この地方の文化がどうしてこんなに進んだかと考えると、それは有明海を舞台に漁業や交易によって富を蓄えた豪族がいたからであろうと考えられます。この下の田古里川の川口に唐津というところがあります。ここは、竹崎島を防波堤とした自然の良港であります。豪族達は、此所を根拠地として、佐賀・大牟田・熊本・島原方面と交易したり、漁業をし、又時には中国とも往来したのではないかと思います。

今から1400年前には、現在のような機械もありません。このような時代に、こんな大きな石を海岸から運んで来て、この山の上に積みあげるには、とても多くの人々を長時間使わねばならなかったと思います。当時、此の地方に住んでいた豪族の力が、如何に大きかったかをあらわしています。この地方の古墳の口が、みんな唐津の方角をむいているのを見ると、唐津と何か関係がありそうに思われてなりません。

7. 道越古墳



太良町内の古墳中で、規模が最も大きく、保存の良好な古墳のひとつであって、封土の直径9.5メートル。比高4.6メートルの円墳であります。

西南に開口する単室の横穴式石室で石室の全長11.8メートル。玄室は自然石の巨石の上に大きな塊石かいせきを持送けんしつって築かれています。玄室は奥行4.8メートル。幅2.9メートル。高さ4.3メートルです。

この古墳は、6世紀後半頃（1400年位前）に構築されたものと考えられ、当地方の古墳文化を知る上で、重要な遺跡であります。

この古墳も、有明海を舞台に活躍した豪族の古墳であろうと思われます。

8. 広江宝前鼻古墳群ほうぜんばな

太良町の古墳は、道越・野崎・広江・波瀬の浦・伊福等、海岸線に沿った丘の上に分布しています。

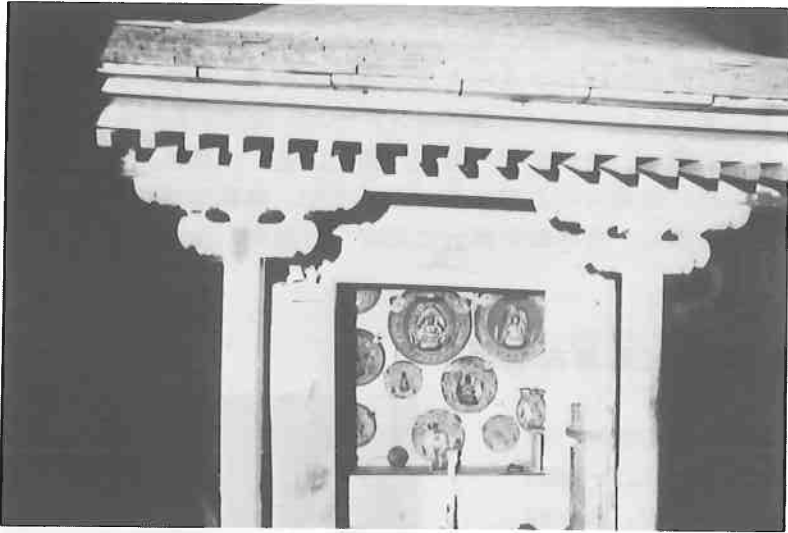
弥生時代から古墳時代にかけては、海岸沿いに人々がたくさん住んでいたことを証明しています。

この宝前鼻には、ことに数多くの古墳があります。ここの古墳は、今から1500年位前の5世紀後半頃のもので、堅穴式のものから横穴式に移行する過渡期的なものとして推定されます。

ここの古墳からは、前に直刀や土器の破片が出土しています。



9. 御手水権現さん^{おちようず ごんげん}



神殿の裏に高さ10メートル余りの滝があり、年中清水が流れ下っています。

昔、景行天皇が行幸の折、この滝の水で御手を洗われたので、御手水の名がおこったといわれています。

この神殿には11体の懸仏かけぼとけが祀られています。懸仏は円形の銅板に金銅造りの仏像を浮彫にしたものです。平安時代頃から伝わった神仏混淆思想こんごうの名残りで円形の銅板は、鏡を形どり、神様をあらわし、仏像は仏様をあらわしています。

権現さんは、仏様が神様の姿をして現われたものです。ここの懸仏は江戸時代の初め頃から江戸時代後期にかけて、数回にわたって造ったものであろうかと思われます。尚、一番下の御堂の中には、江戸時代頃の作と思われる木彫金箔塗りの千手観音像を中心に、左右に阿彌陀如来像と薬師如来像が祀られています。又、道下の大銀杏のある的場では、毎年1月8日、御手水部落の人達全体で、まとい的射りの行事が古くから行なわれています。

的射りの祭は、その年の初め、弓矢で的を射て悪魔をはらい、幸運を射とめようという吉凶占いの祭です。

10. ^{おおこうち}大川内の地蔵院



この地蔵院の正面には、十六菊花御紋章が残っており、昔、勅願寺竹崎観世音寺の支院であったことを物語っています。

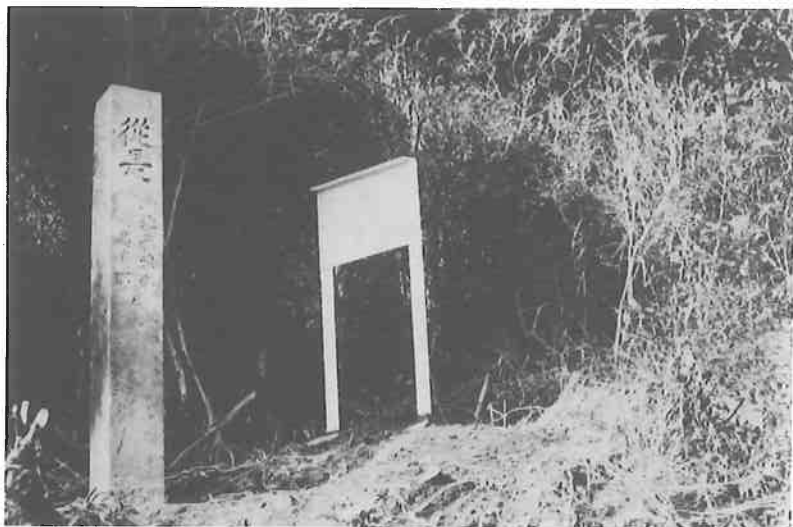
中には木彫りの半跏趺座^{はんかふざ}の地藏菩薩像を中心に二体の閻魔王^{えんま}が祀られています。この閻魔王と一緒に祀る様式は大変古いもので、この地藏菩薩像は少なくとも、今から400年～500年前の室町時代の作といわれています。彫刻も大変精巧で綺麗な地藏様であります。

この地蔵院の裏に湧きあって、近くの子供達はこの湧きで泳ぐ時、この地藏さんを抱いて泳ぐと河童^{かっぱ}におそわれないといっ、川の中で地藏さんを奪いあつて泳いだということです。

大川内部落では、この地蔵院のことを、「蔵さん^{ぞう}」と呼んで、毎年千燈籠をあげてお祭をしてきました。

昭和60年の初め、佐賀県立博物館で中世美術展が開催されましたが、太良町の代表として、竹崎観世音寺の般若心経と共に、ここのお地藏さんが展示されました。

11. 山茶花さざんかの茶屋



江戸時代の寛永19年（1642年）徳川幕府は、佐賀の鍋島藩と、福岡の黒田藩に一年交替で長崎港の警備を命じました。その為、鍋島藩の殿様や家来は一年に何回も長崎へ行かねばならなくなりました。

初めは、長崎街道の大村を通っていましたが、大村は大村藩領で不便でした。その為、肥前山口の小田から分かれて鹿島を通り、多良の山越えをして、諫早えいしやうの永昌駅で長崎街道に出る諫早街道をこしらえました。

山茶花の茶屋は、標高350メートルの諫早街道の中で最も高い所で、昔、殿様や旅人が休む茶屋があったところです。この茶屋で餅と山芋のとろろ汁をこしらえて、旅人に売っていたそうです。又、茶屋の前には、昔から大きな山茶花があったそうですが、枯れてなくなり、今はそのあとに小さな山茶花が植えてあります。

太良町の民謡「岳の新太郎さん」の第四章目に「傘を忘れて、山茶花の茶屋にアラ、ザンザ、ザンザ、空が曇れば思い出す」とありますが、ここの茶屋で山芋のとろろ汁に心を奪われて、笠を忘れてしまったのでしょうか。

この茶店から80メートル程東の山の中に長崎県と佐賀県の境界柱が立っています。

この石には、「^{とれより}従是 南 高来郡
北 藤津郡」と記し、

裏面には、「高来郡之内遠竹村
藤津郡之内田古里村」と記してあります。

12. 石造三重塔

佐賀県指定重要文化財で、今から750年前の鎌倉時代中期の作といわれています。南北二基があり、^{ぎょうかんがん}凝灰岩を石材として作られた高さ約2.2メートルの別石三重層塔であります。

その作風、造形の美しき、精巧さから推して、遠く近江文化、人吉文化を伝えるものがあります。

我が国の石造美術の頂点を示すもののひとつであります。



竹崎観世音寺境内

13. 石造六地藏塔

太良町指定重要文化財であります。

大永5年(1525年)建立で、肥前国六地藏塔の中でも最も古いもののひとつであります。
瀟酒^{しやしやうび}優美で、洗練された美しさは室町文化の趣^{おぼむき たた}を湛えており、石造六地藏塔の傑作といわれています。



竹崎観世音寺石壇の左横

14. 橋本野^{やすい}醉歌碑



多良駅前

橋本野酔は、鹿島市浜町出身で、歌誌「ひのくに」の会員となり、又、歌誌「姫由理」の主宰としてその歌集の編集に活躍されました。大浦小学校や多良小学校の校歌を作詩された方です。

昭和37年12月9日、多良駅前に岳の新太郎を詠んだ歌碑が建ちました。

火の国は 多良岳 深き 金泉寺
寺侍の 美男 新太郎

橋本野酔氏は俳句も大変上手でした。

昭和58年6月10日 逝去されました。

15. 八並雄次郎（幽白）歌碑

八並雄次郎は、鹿島市七浦音成出身です。

この歌碑は、氏が大浦中学校長であった昭和26年頃学校林の植林記念に建てた歌碑であります。

桧^ひ苗^{なえ}三千 木とな
る頃の 楽しさを
生徒^こ等^らと語りて
またのぼりきぬ



黒金の植林地入口

16. 吉田瑞穂詩碑



太良嶽神社前

吉田瑞穂は、明治31年太良町油津に生まれました。

佐賀県師範学校卒業後、多良小学校の先生をしていましたが、後に上京し、杉並第七小学校長を最後に退職しました。

若い頃から文学に志し、特に児童詩集を数多く出版しました。中でも「しおまねきと少年」は昭和52年、全国芸術選奨文学部門で文部大臣賞を受けました。

「しおまねきと少年」は、氏の少年時代のくらしを歌ったものです。

しおまねきは 潮のひいた磯で
大きなはさみをふりあげ 潮をまねいている

あつい夏の日 しおまねきが
穴から出て 干潟のむこうの
潮をまねくと 潮はじりじりみちてくる

少年は 海芝にすわって

ハゼのよくつれる河口に 潮がさしてくるのを
待っている しおまねきと一緒に

17. 碇 登志雄歌碑

肥前風土記に、景行天皇が筑紫の国に行幸の折、この太良の郷に来られて、「地勢は狭くあれども、食物豊に足らえり。豊足の村というべし」とおおせられました。

太良の郷という地名は、これからきたものです。

太良町では、昭和57年11月28日、歴史民俗資料館の横に



健康広場の歴史民俗資料館の横

太良びとは心豊けし 遠つ世の
ゆたたり村の名をおひ継ぎて

という碇 登志雄の歌碑が建てられました。

碇 登志雄は、鳥栖市出身で姫由理短歌会の主宰者です。

18. 星野満郎歌碑

海の上の
雲のあかねに
心澄む
くにの夕べの
ひとつひぐらし

星野満郎は、太良町波瀬の浦出身で、姫由理短歌会やひのくに短歌会の同人として、活躍した人です。

この歌は、星野満郎が太平洋戦争に出征されて、久しぶりに故郷に帰還された時の感懐

と故郷の夕暮れの美しい情景を詠んだ歌です。

歌碑の文字は、ひのくに短歌会の主宰者、中島哀浪の書であります。

星野満郎は、多良小学校卒業後、鹿島銀行（佐賀銀行の前身）につとめていましたが、後で大町炭坑に事務員として転勤しました。昭和35年、交通事故の為、大町町で死亡しました。



波瀬の浦

19. 島木赤彦歌碑

田を作り
蚕を飼ひて
老いにけり
尊くもあるか
その老人は

島木赤彦は、大正時代の日本でも指折りの歌人です。

太良町でも大正から昭和初期にかけては、養蚕が大変盛んでした。

この歌は、日本を築いてこられた老人達に対する感謝の気持ちを歌ったものです。



老人福祉センター前

20. 平浜神社

平浜部落の育ての親、岸川松南先生をお祀りした神社で、別名・岸川神社とも申します。

岸川松南先生は、幼名を文太といい、諫早候の重臣で、幼少の頃から文武の道に励み、剣道の達人で、明治元年、諫早候の兵を率いて入京し、皇城を守られました。その後、諫早に帰り、藩政にあずかり、明治維新、北



道越

高来郡の副郡令を命ぜられました。そして、平浜の地を巡視し、数十町歩の田畑が荒れているのを見て、その開拓を思い立ち、北高来郡の田結^{たえ}地方から12戸、天草郡赤崎村から4戸、合計16戸の人々を諭して、此の地に移り住ませ、製糖業を始めさせました。

ところが間もなく、大暴風雨が来襲して、家もさとうきびも一切が倒壊し、その上、伝染病まで流行して、再起不能の状態となりました。

岸川松南先生、これを聞き、大変驚き、先祖から頂いた土地の代わりに政府からもらった公債を売って金に替え、明治7年12月の暮、大雪の降る日にこの地に来て、その金を16戸の人達に分けてやり、懇ろ^{ねんご}に復興するよう諭し励ましました。人々は泣きながらその金を拝受し、必ずもう一度立ち上がることを誓いました。その後、毎年作物の初穂を岸川先生に捧げ、明治22年、岸川松南先生の頌徳碑をこの丘の上に立て、当時此の地に移り住んだ16名の名前を刻し、岸川先生の功德を讃えています。更に昭和10年、立派な石祠^{せきし}をつくって松南先生を神として祀り、平浜神社と名付け、毎月4月1日、先生の遺族を招待して祭典を行ない、酒肴^{しゅごう}を用意して馳走を振舞い、又、田結^{たえ}地方にあった野狐踊^{やこおど}りを奉納して、先生の遺徳^{しの}を偲んでいます。

当時16戸であったのが、今では200戸以上の民家が立ち並び、農漁業を営んで益々繁栄しています。それというのも、松南先生の御恩を忘れず、こうして地区民挙げて、その遺徳を偲ぶという美しい心と風習が残っている為であろうと思われます。

21. 大乘妙典一字一石塔

糸岐の亀崎丘に、江戸時代の末頃、「亀崎山英俊庵」という庵寺がありました。これは諫早家の第11代茂図しげつぐの二男にあたる英俊えいしゆんが建てたものです。この塔は、数年前、国道207号線の拡幅工事の際、現在地に移転されました。この塔には、文政7年（1824年）10月、「愛女うやまうて敬造立」と書いてあります。また、碑文には



陣の内亀崎丘

「諫早公の命により、水不便なこの地から薪水に便利な陣の内に庵寺を移す。ここに庵寺があつた證しるしとしてこの塔を建てる」という意味のことが書かれています。またこの塔の側には、33体の石造の観音像が並べて建てられていました。今も22体の観音像が残っています。

22. 英俊・保寿靈神石祠



陣の内

善行寺ぜんぎょうの前から三里方面へ通ずる坂道を「ご庵坂あん」といいます。この「ご庵坂」の中途に江戸時代の末、諫早公ゆかりの庵寺がありました。その庵寺のあった所の一段高い丘の上に二基のきれいな石祠が並んで建っています。

ひとつは、英俊靈神石祠えいしゅんで、「文政7年(1824年)11月、当17回辰大願主愛女敬造立」と書いてあり、もう一つは、保寿靈神石祠ほじゅで、「嘉永7年(1854年)5月27日」と刻されています。

英俊は諫早家第11代茂図しげつぐの二男で、保寿はその妻です。

23. 湯牟田古墳 ゆむた



伊 福

伊福古墳群中の代表的な古墳です。横穴式古墳で、びんしつ 玄室とせんどう 羨道に分かれています。

内部は長さ2メートルから1メートル程の巨石を積み重ね、天井には大きな一枚石を載せ、その下に1メートル程突き出た左右2枚の石が、これを支えています。大浦方面の持ち送り式とは異なり、鹿島地方の古墳の造り方と同じです。古墳時代の後期(7世紀頃)のものと思われます。

24. 里の六地藏塔

諏訪神社の前の田の中にあり、天文2年（1533年）に建てられています。六地藏信仰は平安時代頃から盛んになり、初めは墓地や刑場等、人々が現世から来世に旅立つ所に建てられていましたが、後には、道の分岐点や、辻々など、人々の参詣しやすい場所に建てられるようになりました。



里の諏訪神社前

六地藏は釈尊入滅後、
弥勒仏みろくぶつが現われるまでの無仏の世界で、一切の衆生が善悪ごうの業によって落ちる地獄、餓鬼がま、畜生しゅら、修羅、人間、天上の六道の衆生を化導けどうされるという六種の地蔵様です。

当時の地蔵神仰の隆盛を示す貴重な石造文化財のひとつです。

25. 誓願寺の山門

誓願寺は、第107代後陽成天皇（1587～1611年）の御代創建されました。この山門は享保年間（1716～1735年）第8代入誓伝歴上人によって建てられたといわれ、頗る完備しています。

古老の話によれば、名工「託田の番匠」がつくったもので、釘を一本も使わずに造られており、解体する時は、どの栓か一本を抜けば解体されるとのことです。



針牟田

26. 宇賀神社



川内

宇賀神社は明治の初め、佐賀の乱に敗れて太良町に移り住んだ志波氏によって建てられました。祭神は、稻荷大明神です。

志波氏は大隈氏と親類で親しく、且仲のよい間柄でありました。志波家の母は、大隈重信の母上にも宇賀神社を信仰するように奨めたといわれています。その為、大隈候も、この地を訪ねて参詣されたとのことです。

宇賀神社には、石燈籠や石造の水盤など、両家を初め、明治初年、佐賀藩屈指の武将達の寄進されたものが残っています。

27. 平浜古墳



道越

太良町内の大浦古墳群の代表的な古墳であります。入口の羨道は破壊されています。

横穴式の円墳で、造り方は持ち送り式で、側壁を石で積み上げてあり、古墳時代後期の6世紀後半のものであります。玄室の側壁に二ヶ所石が突き出ていますが、これを腕石^{うでいし}といい、物に乗せる台であろうと思われます。

この古墳も、有明海を舞台として富を畜えた豪族を葬ったものと思われます。

28. 円満寺の鐘楼しょうろう

円満寺は第105代正親町天皇おごまちの天正9年（1581年）に創建されました。この鐘楼は、明治14年（1881年）の大火にも焼失を免かれた太良町内でも貴重な建築物のひとつで、弘化4年（1847年）に当時傑僧として庶民の尊敬をはくぎゆうあつめられた白牛和尚おしやうの頃建てられ、鐘楼の垂木たるきは垂木と垂木が平行でなく、扇形に



瀬戸

先が広がっている扇垂木造りで、楼の石垣は熊本城石垣積みの手法で積み上げられていて、清正流と伝えられています。

29. 大野城趾

この城は、天正12年（1584年）龍造寺隆信が島原の有馬晴信を攻めて、沖手なわてで戦死した時、家臣の鍋島信生（直茂）が出陣の前から家臣富岡喜佐衛門、下村生運らをおいて、後を守らせていた城であります。

隆信が戦死したという報が、直ちにこの城に伝えられますと、家臣の下村生運らは鍋島

信生の安否を気遣い、その家臣中原主水もんど けにんに家人源五左衛門を副えて、島原の神代こうじろに調査にやりました。信生らが無事船出したと聞き、翌朝早く家臣らはあとを追ひ全員柳川へ渡りました。

この城の頂上には、清正大神せいしやう儀碑が建てられています。



大野

30. 槇^{まき}ノ内六地藏塔

この六地藏塔には、
天文11年壬寅正月吉日
大江朝臣嶋長門守 逆
修玉翁本清妙忠と書いてあります。戦国争乱の時代、この地方の武将大江朝臣嶋長門守が、戦死した部下領民の冥福を祈る為に建てたものと推定されます。太良町内では、大変古い六地藏塔であります。



槇ノ内

31. 権太郎^{たんだ}谷田

享保年間（280年前）多良の江岡に、権太郎というたいへん親孝行な子供がいました。父の要蔵が中風のため寝たきりでしたので、8才の頃から、母を助けて田畑に出て働き、父親にも孝行していました。

父が御飯を食べると、むせんで食物が喉を通らないので、権太郎は床の下に行って、要蔵

が寝ている所の下半身の床の根太^{ねだ}をはずして頭を高くしてやると、



江岡

要蔵の食事の喉通りがよくなりました。食事がすむとまた床の下ゆかにおいて、床の根太をもとの通りに戻しました。

要蔵が魚を食べたいというと、海に出て魚をとりに行きました。或冬の雪の降る日、一ヶ所砂が高くもり上がっていて、雪も積っていない所がありました。そこを掻き分けてみると、大きなうなぎが何匹もいました。権太郎はそれを取って帰り、料理をして父親に食べさせました。父が酒がほしいと言えば、山に柴かりに行き、それを売って酒に替えて、父を喜ばせました。或時山に柴狩りに行っていると、布に入ったお金が落ちていました。権太郎はそれを近所の人々にも分けてやり、父には酒を買って飲ませました。また父が歌を唱えというと、父の好きな歌を唱って聞かせました。

或る時要蔵が背中がかゆいと言ったので、しらべてみると、しらみがたくさんできていました。権太郎は紙で肌着をこしらえて要蔵に着せました。暫らくすると、しらみが紙の肌着につきました。その時肌着を脱がして、しらみを取ってやりました。こうして肌のかゆみもなくなりました。また或る時要蔵が米の御飯が食べたいと言いました。権太郎がたんぼの側を通ると、真白いおにぎりあぜが田の畦の所に置いてありました。権太郎はそれを持ち帰って父に食べさせました。その日は天神様のお祭りでしたので、村人が朝早く天神様にあげていました。村人が後で天神様に行ってみたら、朝お供えしたおにぎりあぜがなくなっていたということです。それは天神様が権太郎の親孝行に感心して、おにぎりあぜを田のあぜに運んでくださったからだろうということです。

権太郎は父が大便や小便をして身体を汚すと、自分でおしめを洗って、母の手をちっとも借りなかったということです。村人が、「なぜ自分で父の大小便の始末をして、母にはさせないのか？」と尋ねました。すると自分は父の身体の一部を分けてもらっているので、少しも汚いとは思わない。しかし、母は父とは血がつながっていないので、汚いと思うだろう」と言ったそうです。

権太郎の親孝行は村中に評判になりました。

遂には佐賀のお殿様の耳にも入りました。佐賀のお殿様は、母と権太郎に布とお金を褒美として与え、「諫早の殿様の政治がよく、領民を可愛いがるから、そんな親孝行者が出来たのだ」と言っ

て、諫早候までおほめにあづかられました。諫早のお殿様はたいへん喜ばれ、要蔵の死後、権太郎に、たくさんの褒美をやり、また田を与えて、権太郎を武士に取りたてました。

こうして孝子権太郎の名は、諫早家の^{れっし}烈士伝に残りました。今江岡の谷に、権太郎谷田というところがあって、段々になった十数枚の田が残っています。しかし現在はみかん畑になっています。

32. 権現坂の^{あじとう}阿字塔

大浦神社の入口にある鳥居のそばに建っています。元文元年（1736）竹崎観世音寺の法印職増隆によって建てられたものです。

碑文には「阿字^{あじ}（如来）を一見すれば、五逆は消滅し、真言の教をきわめると、身は直^{じょうぶつ}ちに成仏する」ということが書いてあります。



亀の浦

33. 役えんの行者ぎょうじゃ座像

太良町指定重要文化財であります。

多良岳神社の石の鳥居の側に、下駄をはいた白髭しろひげの石像があります。役えんの行者ぎょうじゃは修験道しゅげんどうの開祖として崇められました。この石像は、当時多良岳が、修験道の霊地として栄えていたことを物語っています。役えんの行者ぎょうじゃは平安時代の末頃一本歯の下駄をはいて全国の山々を



多良岳

巡り歩いて庶民を救済されました。里人は今も役えんの行者ぎょうじゃの脚力に靈感を感じて、腰痛、関節炎、神経痛等の平癒祈願をし、お礼に一本歯の下駄をお供えして参っています。

この石像は、正徳2年（1712年）江戸中期の名石仏師、砥川谷とがわの平川与四右衛門の作であります。肥前石造文化の最盛期を偲ぶにたる石造工芸品として注目されます。

34. 六体地藏菩薩立像

太良町指定重要文化財であります。

多良岳山中に、安置されている数々の石像の中で、この六体地藏菩薩は、ほぼ完全な形で保存されています。
はんにくぼり
半肉彫の尊体、舟形光背、台座まで一石で彫られています。総高1.2メートル、前後の均整のとれた優美な像で、町内に残る石造彫刻の代表的なものでありま



多良岳

す。作者やつくられた年など、記されていませんが、肥前石造文化の最盛期であった江戸時代中期の作ではないかと推定されます。

35. 歴史民俗資料館と壺甕棺^{つぼかめかん}



太良町歴史民俗資料館は、昭和57年2月に竣工し、10月から開館しました。町内を中心に約1400点の歴史民俗資料が展示されています。その中に古墳時代末期の7世紀後半（1300年前）の壺甕棺が展示してあります。この壺甕棺は、多良栄町の峯（火葬場附近）のみかん園から出土したものです。この時代は、素焼の壺に死んだ人の遺体を入れて、土中に葬ったものです。この壺甕棺は子供を葬ったものです。太良町重要文化財に指定されています。

IV 祭

1. 竹崎観世音寺^{しゆしようえ}修正会^{おにまつり}鬼祭



佐賀県重要無形文化財に指定されています。

更に昭和60年1月、国の重要無形文化財に指定されました。

毎年1月5～6日の両日行なわれ、裸^{はだかまつり}祭ともいわれます。修正会とは、年の初めの生命^{よみがえ}の蘇^たりを讃え祝う祭です。

この島の夜燈鼻沖の海中に住む鬼と、この観音堂内の鬼箱の中に封じ込められている鬼が、正月5日の夜、満潮に乗じて互いに呼び合い一緒になると、この島が覆^{くつがえ}るといふ言い伝えがあって、これをさせない為、若者達^{かんせい}が喊声をあげて、観音堂内の鬼の面箱を封じ直すという勇壮な裸絵巻であります。

祭の主役は青年組で、祭の期間は青年宿に泊り込み、身を清め、細かい規則に従って生活します。青年中から選ばれた4人の鬼副^{おにぞえ}が鬼箱を持って観音堂から走り出ると、待機していた裸の青年達が、一斉に喊声^{かんせい}をあげて、鬼箱めがけて突進し、鬼副の持った鬼箱の脱出を阻止します。この時、鐘や太鼓、法螺貝の音が響き渡って、祭は最高潮に達します。

こうして鬼箱は元の観音堂内に封^{ふう}じこめられ、元の場所に安置

されます。

この行事が寒中の5日夜から初められ、初夜、後夜、日中と6日までに3回行なわれます。観世音寺に千年も前から続けられている祭です。

2. 鬼火たき



陣の内

「ほんげんぎょう」とも呼ばれ、毎年1月7日の夜（又は朝）一年間の無病息災を願って行なわれてきました。太良町では、昭和37～38年頃までは、どこの部落でも盛んに行なわれていましたが、現在では、糸岐の陣の内や、大浦の里等で僅かに残っているだけです。

以前は子供達が1月4日～5日頃から近くの山や川岸道端等から、青竹や雑木を伐り出したり、近所の民家を回って、藁や麦わらしてもらい集め、海岸や川岸、田んぼの中など、火事の起きない場所に、ほんげんぎょうの小屋を作って立てていました。そして7日の夜（又は朝）火をつけて燃やします。激しく燃えあがる火柱に背や腹をあぶり、無病息災を祈ります。又、残り火に餅を焼き、それを神仏に供えて食べ、一家の健康を祈ります。火柱の中に正

月のメ飾りや書き初めを投げ入れて燃やし、家内安全や字が上手になるようにと祈ります。ところによっては、焼け残りの青竹を曲げて三角形を作り、それを門先に立てて魔除けにしたり、家の回りの「とぶ」などをたたいて家内の無病息災を祈ったりしました。

3. ^{おちようず} ^{まとい} 御手水の的射り



御手水

御手水部落では、毎年1月8日、御手水権現さんの下の大銀杏のある^{まといば}場に集まって、古い伝統ある「的射り」という祭を行います。

神酒^{みきみけ}神食を神前に供えて、初祈禱^{はつきとう}を行ないその後、青竹と「かずら」で作った弓に、青竹の矢をつがえ「東西南北」と書いた「エイ」という的と「鬼」と書いた的を射ます。

「エイ」は1月8日の早朝、まだ朝露のついた女萱^{めがや}を田のあぜから引いてきて、四角形に編み、その上に白紙を張って「東西南北」と書きます。女萱は、田のあぜに集まってくる害虫が稲を食い荒さぬようにとの願いからであろうとされています。又、朝露には、神の霊が宿るとの信仰があります。この的を弓矢で射る

ことは、あたり四方を清めて悪魔を払うという意义があります。鬼と書いた的は、藁を編んで丸くこしらえたもので、これを射ることも、悪魔を退治して、家内安全、五穀豊穰、天下泰平を祈るものです。

なお、最後に、竹の枝を丸型に曲げて紙を張り、◎型に書いた的を射ます。

「エイ」と「鬼」の的は合計で33,333本射ます。最後に◎型の的を一本射て的射りの行事は終ります。3という数字はお「産」の「さん」に通じお祝いの数の代表であります。側にソロバンを持った計算方^{かた}がいて、的を射った弓矢の数を計算します。的を射た人は、射た弓矢の数を計算方に報告していますが、早く33,333本になるように、うその報告をします。33,333本になると、的射の行事が無事に済んだことを区長は神主と共に御手水権現に報告します。

それがすむと、部落中の老若男女が区長宅に集まり、会食をしながら、一年間の無事平安と、その年の豊作を祈って語り合うのです。

4. もぐら打ち



みちごしなげま
道越竹崎

大浦の道越や竹崎部落では、子供達を中心となって、竹やメンソーという折れにくい木の枝の棒を作り、それに藁づとを巻きつけてもぐら打ちを作り、1月14日の夕刻、部落内の各家々を回って、庭先や屋敷の周囲を「唱え言」をしながら打って回ります。

各家々では、餅・みかん・干柿・銭等をもらいます。終了後は、庭先の柿の木やみかんの木等の果樹に、もぐら打ちの棒をかけておきます。その後、年毎にまわり番で定められた家に行き、ぜんざいを食べたり、もらい物を分けあったりします。

田畑を荒らすもぐらの害を防ぐ為と伝承された所が多いが、中には、初嫁の来た家とか、男の子の生まれた家等に限り回る地区もあり、これらの家では特に念を入れて打つところもあります。

もぐら打ちの時唱えることばは所によって異なりますが、作物の豊作を予祝するもの、家の繁昌を祈って唱えるもの、嫁の豊産を予祝するもの等があります。

道越部落では、「もぐらもっしょい。こうもっしょい。ここはおい(俺)が屋敷ぞ。忠円どん。忠円どん。包丁貸しやい。鉋貸しやい。夜さりや(夜は)嫁ご取って追い込みやい。追い込みやい。鶴

は千年亀万年。ここの親父は万万年」と言います。

5. 竹崎の円座祭

毎年1月15日に、竹崎部落の男の子供達が観世音寺と鹿山の鹿大名神しかやま しかだい みょうじんとに分かれて、古くから行なっている祭です。

子供達は前日から、藁を編んで円座をこしらえたり、長い女竹を切ってきて竹槍をこしらえたりします。当日になると、観音さんと鹿大名神さんの境内に集まって、藁や木をた



竹崎

き、その煤を顔や腹・胸等にぬります。又、相撲をとったりします。その後で一人が空高く円座を投げ上げます。その円座が落ちて来るのを他の全員がそれぞれ手に持っている長い竹槍で受け止めるのです。それを何回も繰り返した後、円座を寺社の屋根の上にはうり上げます。

今から10年余り前までは、青竹で弓や弓矢を作り、的を射る行事も行っていたそうです。この祭は年の始めにあたって、その年の吉凶を占うと共に、幸運を射止めようという人々の素朴な願いがこめられています。

6. 竹崎観世音寺の星祭



竹崎

2月4日は節分です。節分は、長かった冬を終えて、明日からの新しい春（立春）を迎えるという一年の区切りの日であります。我が国では、古来神社等で「福は内、鬼は外」と掛け声をかけながら、豆をまいて、新しい年の幸運を祈るという風習が古くから残っています。竹崎観世音寺には、地元竹崎は勿論鹿島・白石・諫早・長崎・その他各地から、多数の善男善女の熱心な信者が集まり、護摩堂で護摩をたいてから豆をまき、家内繁昌・無病息災・交通安全等この年の幸運を仏に祈る星祭が古くから行なわれています。

これは仏教の中で、宇宙と個人の生活の深いかかわりを示す密教の行事で、現実生活の宗教味を現わしています。

7. 竹崎観世音寺の流れかんじょう灌頂

毎年5月の中旬、竹崎観世音寺で取り行なわれる古い祭です。港の側に設けられた祭壇で、魚介類や先祖及び水子みずこ等の供養を行ないその後観世音寺の法印沢さんを初め、参詣した信者たちが、大漁旗を揚げた地元の漁船数十隻に分乗して、港から有明海に出航し、船団は竹崎の沖合4～5キロをゆっくりと回り



竹崎

ながら、鐘や太鼓を打ち鳴らし、お経を唱えながら、海に卒塔婆そとうぼを流して先祖の菩提を弔い、家内安全や、漁の安全を祈願します。実に勇壮な祭であります。

流れ灌頂そそとは、法の水を頭(頂)に灌ぐという意味であり、先祖の霊が完全に成佛するようにという願いと、生活の為とは言え、不殺生の戒めを破らねばならない漁民達の魚介類に対する供養でもあり、竹崎観世音寺に400年間も伝わるお祭です。

数百名の信者が遠近を問わずに集まり、盛大に行なわれ、有明海の初夏の訪れを告げる風物詩であります。

8. 竹崎観世音寺のきゅうり封じ祭

竹崎観世音寺では、毎年8月1日～5日迄きゅうり封じ祭があります。もう500年も前から続いている祭です。地元や県内は勿論、長崎・福岡・熊本県等から熱心な信者達が数百名も訪れます。

この祭は、各人一本の胡瓜きゅうりを持ってきて、その胡瓜に願いごとを書いた和紙を結びつけます。例えば、「家内安全」「交通安全」「無病息災」「安産子育」等さまざまなお願いがなされます。

護摩堂内のお地藏さんに胡瓜を供え、護摩をたいて、法要祈願した後、本堂裏の胡瓜塚に胡瓜を一つ、一つ丁寧にほうり込みます。塚は直径1.5メートル、深さ1メートルもあります。

祭の終わり頃になると、数百本の胡瓜の山ができます。最後に土をかけて埋めます。最近では、高校や大学受験、就職試験等の合格を祈願する者も多くなったそうです。

人生の諸々の、苦患を克服（封じる）して、高らかに生を讃えて生活する密教の深い教えを素朴な民間行事として古来から行なってきたおり、この世に極楽を実現することであり又、人生そのものを超越する教えでもあります。



9. 太良嶽神社の秋祭



油津

多良・糸岐地区では、毎年9月の第2土曜、日曜日を太良嶽神社の秋祭の日と定め、氏神様に五穀豊穡と家内安全を感謝して祀る供日祭が古くから行なわれてきました。太良嶽神社は、ににぎの尊・五十猛尊・大山神・豊玉姫命（乙姫様）を祭神とし、昭和46年太良嶽神社（多良岳）と、産土神社であった川上神社、荒穂神社と共に、油津海岸に三社を合祀したお社で、昔から町民の信仰の篤かったところです。

今日では、多良川と糸岐川の川北地区（旧北多良・北糸岐）と、川南地区（旧南多良・南糸岐）がまわり番に浮立を神社に奉納しています。荒穂神社の祭神ににぎの尊は、特に浮立が好きで、或年、浮立の奉納をやめたら、俄かに社殿が震動して、境内に建っていた石祠にもひびが入ったと伝えられています。

浮立は、約400年昔の元亀元年（1570年）肥前の龍造寺隆信と、豊後の大友宗麟が戦った時、佐賀市の北方今山に陣した大友親秀の陣に、鍋島直茂の一族が鬼の面とシャグマをかぶり、陣太鼓の音と共にときの声をあげて夜討ちをして大勝し、その戦勝祝に勝利をもたらした衣裳の鬼面とシャグマをつけて踊ったのが、この

踊りの起源といわれ、肥前の国の祭に祝事として伝わる郷土芸能であります。

発生地は明らかではありませんが、鹿島地方の浮立は、太良地方から伝えられたといわれ、県内では、太良地方が一番早くから伝えられてきたと思われます。太良は更に、諫早方面から伝えられたという説があります。

10. ^{かぶた}蕪田の泥餅つき



蕪田

太良町蕪田部落で、秋の彼岸の終わりの夜に開催される祭で「薬師さんのお通夜」とも呼ばれます。泥餅つきは、もと若者頭の家の庭先でまわり番で行なわれていました。もと蕪田公民館の側に薬師堂がありましたが、今は公民館内の一堂に薬師如来像が祀られていて、泥餅つきも公民館前の庭で行ないます。

相撲やのど自慢等の余興のあと、パンツ一枚の裸姿の青年達によって餅つきが始まります。

朝の内に各戸から一升づつ餅米を集め、初めは白餅をついて各家に配ります。頃合いを見て、臼の回りに赤土を入れ、水をまいて故意にすべり易いようにします。臼の中に既につきあがった別

の餅を入れ、杵を臼きねの中に入れてテコとし、数人の者が臼の周囲をぐるぐる回ります。足元がすべり易くなっている上に、隣の者同志が互いに足をかけあう為に転んでしまいます。泥まみれになった青年達には、力水ちからみずがふりかけられます。こうして、搗きあがった泥餅はお盆に入れて、薬師如来さんに供えます。

泥餅つきの起源は明らかではありませんが次のような言い伝えがあります。

昔、金兵衛さんという人が、息子夫婦に留守を任せて、お伊勢参りに出かけました。留守中に物もらいが来て、種もみとして村から頼まれて干していた餅もみを「分けてくれ」と乞うたので、一升程分けてやりました。息子夫婦が物陰から見てみると、更に盗み取っていました。それをとがめたところが、薬師堂のカヤの木に首をつって死んでいました。それで村では無縁仏として葬りました。その後息子は身体が悪くなり、金兵衛さんも夢にうなされ、大雨と干天が繰り返し続き、家も村も様子が一変しました。これは無縁仏が成仏できずにいるからだといって、そのカヤの木で薬師如来を作り、大雨で汚れた餅米で餅をついて供養したら、又、平和な村に戻ったということです。

それ以来、蕪田では泥餅をついて薬師さんに供えるようになったそうです。

11. 十夜市



太良町を代表する年中行事の一つに十夜市があります。新米ができる頃ともなれば、名物として古くから太良町に伝えられてきた“十夜飴”が、町じゅうの至るところの店先で売られるようになります。

“十夜市、それは、いつとはなしにすっかり太良町の人々になじんだ言葉となり、今では町内の老若男女に親しまれています。

その昔、糸岐の誓願寺の本尊、阿弥陀如来の十日十夜の法要に、近隣各地から集まって来た露店商が、寺の石門から山門、山門から本堂迄の境内に店を並べて市を開いた。皿、茶碗をはじめ、農具、玩具、ガマ膏葉、たこ焼、綿菓子から植木に至るまで。特にひときわ人気を集めたのが、のぞきにバナナのたたき売り。うどんにおでん、一杯飲み屋の屋台に至る迄、処狭しと並べられ賑わいました。その中に十夜飴も売られました。

参道の石畳は善男善女であふれ、本堂の中からは、^{どきよう} 説経、^{ごえい} 御詠歌が流れ、お説教の音が響いていた。これが誓願寺の戦前迄の十夜風景でありました。法要が終った翌日、売れ残った品物売るため、多良町（現在栄町）に市がたった。これが裏十夜と呼ばれ、

現在の十夜市の始まりとなっています。

十夜とは十日十夜の略称で、阿弥陀如来が衆生済度の本願（約束）を成就されたことに対する感謝報恩のための法要であり、旧暦の十月五日の夜から、十五日の朝まで十昼夜行なわれました。また、お米や野菜その他いろいろな果物の収穫に感謝し、明年もまた豊年満作であるようにお願い、寺院では珍しい「めでたい」法要であります。十夜法要には、昔から、その年の新米で紅白の餅をついて阿弥陀如来にお供えします。その報恩感謝の餅が、無病息災を願う餅飴となり、十夜飴と呼ばれて親しまれているのです。

十夜法要は各地で行われていますが、十夜市と十夜飴は全国で、太良だけしかありません。

今、むらおこし運動が盛んに行われています。特に今年は、新町建設三十周年を記念して商工会が中心となり、町をあげての“商工まつり”、“十夜市”が盛大に行われましたが、これが地元商店の活性化と、我が太良町の“むらおこし”運動のひとつともなれば、たいへん有難いことと思います。（誓願寺住職 大井法秀）

V 民俗芸能

1. ^{こうばる}川原狂言



川原

太良町上^{かみこうばる}川原に伝承されている民俗芸能で一名川原浮立ともいいます。能や歌舞伎の影響を受けており、皮浮立の一種である一声浮立と称する笛、太鼓の^{はやし}囃子を伴奏として、野外で行なわれる農民の演劇で「舟弁慶」「羅生門」「大江山鬼退治」「志賀団七仇討」の四曲が今も残っています。江戸時代頃から伝わるものといわれ、佐賀県の重要無形文化財に指定されています。

2. 民謡 ザンザ節 岳の新太郎さん



「ザンザ節」は江戸時代の中頃から太良町に伝承されてきた民謡であります。

多良岳は、古来霊地と考えられ「和銅年間に行基菩薩が来て、弥陀、釈迦、観音の聖像を刻んで祀った。これが金泉寺、多良岳大権現の初めである」。と金泉寺に建てられた碑に書いてあります。又、平安時代には、弘法大師が来て、身の丈4尺(130センチメートル)余の不動明王を刻み、金泉寺の本尊としたと言われます。平安時代以後修験者の道場として重要な霊場でありました。

ザンザ節に謡われた「岳の新太郎」は江戸時代の中頃、金泉寺の寺侍でありました。金泉寺は太良岳神社の神宮寺でもありましたので、寺侍でありました新太郎は、金泉寺と太良岳神社の仕事をしなが、金泉寺に起居して修業に励んでいました。そして寺の用事をしに度々多良の里に下って来ました。新太郎は眉目秀麗、頭を青くそり、絵に書いたように美しく、新太郎が里へ下って来ると美男新太郎を一目見たいものと、村中の娘達があちらこちらの里から集まって来て騒ぎました。美男新太郎は村娘達のあこがれの的でした。

ザンザ節は、村娘達の新太郎に対する慕情を歌ったものであります。

歌詞は次の通りです。

1. 岳の新太郎さんの下らす道にゃ
アラ ザンザ ザンザ
金の千燈籠ないとん明かれかし
いろしゃ すいしゃ
色者の粋者で気はざんざ
アラ ヨーイ ヨイヨイ ヨーイ ヨイヨイ
2. 岳の新太郎さんな高木の熟柿
アラ ザンザ ザンザ
竿じゃとどかぬ登りゃえぬ
色者の粋者で気はざんざ
アラ ヨーイ ヨイヨイ ヨーイ ヨイヨイ
3. 岳の新太郎さんの^{のま}上らす道にゃ
アラ ザンザ ザンザ
道にゃ水かけ滑めらかせ
色者の粋者で気はざんざ
アラ ヨーイ ヨイヨイ ヨーイ ヨイヨイ
4. 傘を忘れて^{きざんか}山茶花の茶屋に
アラ ザンザ ザンザ
空がくもれば思い出す
色者の粋者で気はザンザ
アラ ヨーイ ヨイヨイ ヨーイ ヨイヨイ

3. 鎌踊り



川原

太良町川原地区に伝承されてきた踊で、大村市の黒木地方から伝えられたといわれています。一名「野草刈り」とも称されています。水田の緑肥として使用する野草を刈る時に歌われていた労働歌です。踊は、「野草刈唄」に伴う踊です。歌詞は次の通りです。

のぐさ
野草刈りなされば、とまいわ ひあて
泊岩の日当 サノサイサイ。

日当なかときゃ陰びらに サノサイサイ。

切れたわらじも粗末にゃならぬ サノサイサイ。

お米育てた親じゃもの サノサイサイ。

竹に短冊七夕様よ サノサイサイ。

年に一度の星祭 サノサイサイ。

踊り手の衣裳は木綿の着物に手甲、わらじばき、研ぎすまされた鎌を持ち、三味線、小太鼓、拍子木等の囃子によって踊ります。

実に勇壮な踊であります。

4. 新地節



川原

「潟荷ない踊」ともいわれ、藩政時代、諫早の小野島干拓事業に伴って歌われた労働歌であります。諫早市から熊本県八代付近迄、有明海沿岸に伝えられています。太良町は、藩政時代は諫早領であったため、早くからこの歌と踊が伝承されてきました。

潟どんば荷なおよりゃ、わが身どんば飾れ。
わが身コラショイ、飾れば金貰う。
来たらば寄いな。道端じゃるけん。
冷酒ひやざけ呑ません。燗かんつけて待っとる。アラサイサイ。

新地お役人な、このしろ無塩ぶえん。
長うはもたえぬコラショイ、夏の魚。
逢うたも、抱ほいたも、ねんねこしたも
お前ほの方から惚れたじゃないかい。アラサイサイ。

新地しもてから、小野島んば見れば。
かわいいコラショイ。お春やんが潟いなう。

ひきわいごぜんの炊きおきは
いっときさませば、ばらいしょ、ばらいしょ。
アラサイサイ。

踊りは、おーこ（てんびん棒）の両端に渦めごを吊るしてかつ担いだ者と、板鍬を持った者が一組になり、歌に合わせて、渦をめぐしよめごに入れる所作をしながら踊ります。

5. おゆきと妙みようごん巖いんさんの歌

岳の新太郎は長じて後、妙みようごん巖いんさんと呼ばれる名僧となりました。妙巖さんは近隣の娘の憧れの的となりました。特に大村の黒木部落のおゆきは妙巖さんと恋仲になり、毎晩多良岳まで登っていき、妙巖さんと会う瀬を楽しんでいました。多良岳は女人禁制のため、おゆきは多良岳の金泉寺を訪れることはできませんでした。それで妙巖さんは、おゆきさんと会うために山を下りて、黒木の岩のある所まで下って会っていました。今その場所を妙巖さんと呼んでいます。

歌詞は次の通りです。

一つとせのこいこい　一人娘のおゆきどん
みようごんさんにかかりようて世話ござる
さーこいこい

二つとせのこいこい　二人山道ゆくときは
ぐせつばなし
愚説話で日を暮らす
さーこいこい

三つとせのこいこい　道々案ずる里のこと
山坂なかいば（なければ）くだろもね（くだりたいものを）
さーこいこい

四つとせのこいこい　四つとは金ぞうさんの仲立ちで
金ぞうさんの仲立ちで　でけたこと（できたこと）
さーこいこい

五つとせのこいこい　いつまでこうして多良岳に
師走十三日のその日まで（奉公人の入れ替わる日）
さーこいこい

六つとせのこいこい　無理な所よ多良岳は
しし^{たぬき}猪や狸の物語り（すみやどころ）
さーこいこい

七つとせのこいこい　何を待つ待つ　二、三月
札打ち巡礼さんを待つばかり
さーこいこい

八つとせのこいこい　屋敷に植えたる紅葉^{もみじ}ばの
紅葉ば眺めて日を暮らす
さーこいこい

九つとせのこいこい　此所で会わずばどこで会おう
極楽浄土の道で会おう
さーこいこい

十とせのこいこい　とんとん戸口に立つ人は
妙巖さんと思うたらはやの風
さーこいこい

十一とせのこいこい　十一、一夜は雨嵐
片手に花持ち濡れ衣
さーこいこい

十二とせのこいこい　十二段から水が出る
そのみぎ（水は）おゆきどんの化粧の水
さーこいこい

十三とせのこいこい　十三桜は今つぼみ
おゆきどんと妙巖さんは今が花

さーこいこい

十四とせのこいこい 十四 薬師さんに願かけて
おゆきどんと妙巖さんは添うの願

さーこいこい

十五とせのこいこい 十五夜お月さんな松の影
おゆきどんと妙巖さんな人の影

さーこいこい

十六とせのこいこい 十六羅漢さんは岩に立つ
おゆきどんと妙巖さんは^{かど}門に立つ

さーこいこい

十七とせのこいこい 十七島田は いつとける
明けて三月中^{なか}の頃

さーこいこい

十八とせのこいこい 十八なるとき齒を染めて
島田くずして丸まげに

さーこいこい

十九とせのこいこい 十九くよみにたたきがせ
おゆきどんに織らせて夏羽織

さーこいこい

二十とせのこいこい 肩に折鶴 杖に傘
おゆきどんと妙巖さんは旅に出る

さーこいこい

太良町郷土史年表

時代区分	郷土のあゆみ
先 土 器 時 代	
縄 文 時 代	多良岳の裾野に祖先住みつく 石鏃や石斧などが使われる。
弥 生 時 代	野崎に夜白式土器、及遠賀川式土器が使われる。 波瀬浦に甕形土器、管玉が使われる。 青木平、広江、中畑等にさかんに石棺墓ができる。
大 和 時 代	古 墳 時 代
	田古里、道越、広江、平浜、野崎、伊福等に古墳ができる。 栄町峯に土師器壺甕棺埋葬される。 葛津氏「藤津郡司」となる。
奈 良 時 代	竹崎観世音寺創建、和銅2年(709) 肥前風土記ができる(713) 崇神天皇が「火の国」と名づけられる。 日本武尊「藤津郡」と名づけられる。 景行天皇御巡幸のおり「豊足の村」と名づけられる。 烽が風配峯、日ノ辻山におかれる(伝)
平 安 時 代	葛津郡司、葛津貞津の反乱(866) 肥前各地(藤津、高来、杵島、彼杵、伊佐早、島原)仁和寺の 荘園となる。
鎌 倉 時 代	石造三重塔ができる。 糸岐中峰に須恵器骨壺埋葬される。 竹崎観世音寺菊地氏の味方となり、後醍醐天皇につくす(1333)
室 町 時 代	南 北 町 時 代
	太良町の武士有馬氏に従い懐良親王をたすける。 大浦竹崎城構築。天授4年(1378) 伊福城、多良城(城山、正知田城)糸岐城(八幡城、城の辻) ができる。
戦 国 時 代	有馬氏、藤津郡を領す(1470~1570頃) 西郷氏、有馬氏に属し、藤津郡を領す。 竹崎に六地藏塔できる。大永5年(1525)
江 戸 時 代	龍造寺隆信島原の沖田畷に戦死す。天正12年(1584) 伊福、江福、飯田とともに神代氏の所領となる。 大字多良、大字糸岐、大浦、諫早邑となる。 太良町内の浄土宗、真宗の寺院が建てられる。

時代区分	郷土のあゆみ	
江戸時代	<p>多良と竹崎に上使屋が設けられる。寛文4年(1664) 多良川の洪水で上使屋流される。元禄12年(1699) 竹崎、夜燈鼻燈台設けられる。寛延元年(1748) 諫早騒動起きる。寛延3年(1750) 雲仙岳爆発し、津波竹崎を襲う。寛政4年(1792) 多良、大浦の茶、木ろう、摺海老等を諫早藩が買上げる。 多良、大浦に疫病大流行。天保15年(1844)</p>	
近代	明治時代	<p>平浜開拓団入植す。明治元年(1868) 伊万里県に属す。明治4年(1871) 町村合併により、多良村、糸岐村、大浦村、飯田村となる。明治5年(1872) 同年5月佐賀県に属す。 知新小学校開校す。明治6年(1873) 中畑、田古里、竹崎小学校開校す。明治7年(1874) 4月三潞県に属す。8月長崎県に属す。明治9年(1876) 郡制しかれ、藤津郡に属す。明治12年(1879) 6月佐賀県に属す。明治16年(1883) 大浦小学校開校さる。明治17年(1884) 多良村、糸岐村合併し多良村となる。明治22年(1889) 海岸県道大浦まで開通す。明治23年(1890)</p>
	大正	<p>竹崎潜水によるタイラギ漁始まる。大正8年(1919) 太良町内に電燈ともる。大正9年(1920) 大浦郵便局開局す。大正11年(1922)</p>
	昭和時代	<p>糸岐郵便局電話交換開始。昭和2年(1927) 鉄道平坦線(長崎本線)開通。昭和9年(1934) 大町船倉、牛尾呂、開拓団入植。昭和21年(1946) 多良栄町火災。昭和21年(1946) 多良、大浦新制中学校開校す。昭和22年(1947) 多良町制施行。昭和28年(1953) 町村合併により、太良町となる。昭和30年(1955) 集中豪雨災害により、死者44名出る。昭和37年(1962) 佐賀国体の高校軟式野球と登山競技太良町で実施。昭和51年(1976) 県立太良高校開校す。昭和52年(1977)</p>

太良町の文化財 と祭と民俗芸能

1986年1月30日 第1版 第1刷発行
1986年10月15日 第1版 第2刷発行
1989年11月30日 第1版 第3刷発行

編集・発行 太良町むらおこし
実行委員会
太良町大字多良1856番2
太良町商工会
☎ (09546) ⑦ 0069番

印刷所 株式会社 副島印刷
佐賀市高木瀬西6-11-3
☎ (0952) ⑳ 6688番



太良町営野球場から多良岳を眺む(杉本好守氏画)